

前号作品短評A 〈小野澤〉

●線状降水帯の痕生々し蜀魂^{ほとしぎす}

新野祐子

一連タイトル「小白川こじらかわに遊ぶ」から。この線状降水帯は令和四年八月三日からの置賜中心に発生した線状降水帯のこと。河川では、荻生川はぎゅう・小白川の溢水被害が甚大だったことが知られている。全国区のニュースになっていたことから記憶にもある。蜀魂しよこん（しよこん）はホトトギスの異称で、同じく杜宇、不如婦ともに中国の故事や伝説にもとづくもの、という。いずれも治水や農耕に関係するところから、句意にも合っている。夏の季語。復旧事業も現在進行形であり、痕生々しである。痕は爪痕、傷痕に同じか。

全体にイメージは再現性そのもの、みているのは現実。

ロケット花火の句。通販サイトでみても種類が多く、鳥獣除けとうたつてあるものもある。それで、この二句。二句目の調子、ナラティブな感じがいい。

ロケット花火とう熊除けのあり蔵山

バードウィーク ロケット花火は暴力です

夜衾草よぶすまそう、山瑠璃草（やまるりそう）は山菜、山野草（以上六首目、七首目）。しらなかつたが、

そこで（東北、福島県が北限）みる、採れるものようだ。

●わたしにもできるかもしれない剪定を道具は揃つてゐるのだから 布宮慈子

独特な調子だが、一連全体で言葉は剪定のように、しっかりと見分けて使われている。なによりも道具の話を中心に、切り方の話、それと相手。荒れ放題の庭であり、コニファー、ツツジ、ヒバでもある。コニファーはしらなかつたが、針葉樹の総称で、ヨーロッパに自生する（輸入）針葉樹を呼ぶ、という。日本に自生する松などには、呼ばない。

生垣などの剪定を、女性がしているようなことは散歩中にみることがある。昔、庭のある家にすんでいた頃は、剪定の本を買ってやっていたが、切り方のほか、それぞれに時期がある。

三首目、今は動画をみる。ユーチューブにも推しのをり（四首目）、なのだ。

落ち着きて剪定とふもの考えて専門家らの動画みてゐる

取り組み（方）としての剪定。もともと残っていた道具はあつたよう。

残りたる剪定の道具多けれどわれにはゴツく肉刺まめが二つも

推しの推す道具を買ひて使ふとき程よき木ばさみ、剪定ばさみ

程よさ。また、このようなことにもなる。作業でもある剪定、作業記録でもある短歌。

剪定は孤独な作業われのみとまた亡き人と語らふごとし

前号作品短評B 〈慈子〉

●大人のカラオケ唄ふに走り出で幼は踊る食ふを忘れて

梅津純子

カラオケに反応する幼い子どもが、食えることを忘れて踊っている。親族の会食の場面だろうか、大人に混じって食事をしていても幼児は音に敏感で、ひとりでに踊り始める。

カラオケに踊り続ける三歳児の手振り足踏みつひにはスピ

言葉未だ僅かなれども踊り止まぬ幼児に想ふ人と踊りを

くると回り回ったりして、夢中で踊り続ける幼い子どもは微笑ましい限りだが、作者の観察はそれだけでは終わらない。その中に人の歴史における踊りの原初を感じたのだ。

空を指す一本の筆山峡の巨杉覆ふ藤の紫

タイトルの「空を指す筆」は杉の大木を覆っている藤の花の形容だった。日本中、山の手入れができなくなっている現在、藤蔓が絡んでいる杉をたくさん見かける。それは一見、紫の花が美しく咲いているだけだが、別の角度から見ると藤蔓に苦しめられている木にも見える。自然の中の生存競争は厳しい。

●これから雨という校庭に声は漏れ手塚さんどこの教室にいる

小野澤繁雄

おもしろい歌だ。校庭の音が響いてくる距離にいる作者。雨が降るときは音が大きく聞こえたりする。そんな状況か。「手塚さん」という固有名詞も効いていて、ぐっと親しみのある作品になっている。

駅が違ってくらしも違っているような妹の三十年われの三十年

LINEその「お友達登録」の案内が松本町の掲示板にある

きょうだいでも長く離れて暮らしていると、さまざまな違いが露わになることがある。しかし、具体的には何も語らず、互いの三十年を感慨深く捉えている場面だ。後者のLINEの歌は、公共の場所にも「お友達登録」を促すような掲示があり、わずかな違和感を示しているのだろう。たしかにケータイのLINEは写真の添付も簡単で便利なものだが、何でもかんでも登録していたら、ケータイに振り回される事態になりはすまいか。筆者は「お友達登録」というネーミングも、いかななものかと思っている。

●物置の奥のおくより出で来たる古きアルバム 吾のものならず

河村郁子

人手を使って物置をぜんぶ片付けたという作者。自分が知らないものばかりだが、奥から古いアルバムが出てきて、それを見つめている。

亡き長姉の（女学校）卒業記念アルバムが籠りしままに木箱より出づ

目を留めし一葉ありぬ　いもうと吾の七五三の祝ひの姿

いろいろなアルバムが出てくるなかで、長姉の方の卒業アルバムや若いころの写真に懐かしさでいっぱいになる。さらに、自分と妹の七五三の写真まで出てきた。作者は遙か昔をしのびながら、物置に入ったままになっていたアルバムや被写体の家族に対して、感謝の気持ちを忘れない。

戦災を逃れ転居に改築に籠りしままに見守りくれしや

